

令和7年度 第2回小平市総合教育会議 議事録

1 日 時

令和7年12月22日（月）午前10時00分から午前11時20分まで

2 場 所

小平市役所 5階 505会議室

3 出席者

（構成員）小平市長 小林 洋子

教育委員会

教育長 青 木 由美子

教育長職務代理者 阿 部 善 雄

委 員 望 月 克 浩

委 員 吉 本 一 謙

委 員 川 辺 美 沙

（構成員以外の出席者）

川上企画政策部長、白倉教育部長、寺本教育指導担当部長、足立地域学習担当部長、

奥村政策課長、細村教育総務課長、山下教育施策推進担当課長、事務局職員2名

（傍聴者）2名

4 会議内容

午前10時 開会

（開会宣言）

○小林市長

おはようございます。市長の小林でございます。

定刻になりましたので、ただいまより、令和7年度第2回小平市総合教育会議を開催いたします。進行は、会議の主催者である私が務めさせていただきます。

教育長及び教育委員の皆様には、日頃より、小平市の教育行政の推進にご尽力いただき、改めて深く感謝申し上げます。

さて、本年10月1日付けで、青木教育長が引き続き教育長として、また、新たに阿部教育長職務代理者が教育委員として着任いただきました。阿部教育長職務代理者におきましては、初めての総合教育会議となりますので、ご挨拶をよろしくお願いいたします。

○阿部教育長職務代理者

阿部でございます。10月1日から教育委員を拝任いたしました。小平のこどもたちのために精一杯頑張りたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○小林市長

ありがとうございました。どうぞよろしくお願いいたします。

次に、本年度の第1回総合教育会議の振り返りをいたします。

本年7月に開催いたしました第1回総合教育会議では、「学校施設の複合化を契機とした地域コミュニティの醸成」をテーマに議論を交わしました。この協議を通して、複合化により期待されることや課題などを皆様と共有できたと考えております。

（協議事項）

○小林市長

それでは、本日の協議に入ります。

本日の協議事項は、「生きる力を育む 小平市のこれからの特別活動」でございます。

小平市では、めざす将来像として、つながり、共に創るまちこだいらを掲げており、実現に向けた目標の一つに、将来にわたって多様に活躍できるひとづくりを位置付けております。この「ひとづくり」において、学校教育での取組はとても重要な役割を担っていると捉えております。

市では、こどもを中心に位置付け、その上で、それぞれのこどもの可能性を引き出し、才能や個性を伸ばす教育、言語能力やコミュニケーション能力を高める教育、視野を広げた社会性や国際性を養う教育に取り組むこととしており、現代社会における、多様性を尊重し、共につながりながら認め合い、自分らしくいきいきとその個性と能力を十分に発揮できる社会の実現を目指す必要があります。

これには、こどもたちの成長過程の中で、多様な他者と協働する、話し合いにより合意形成や意思決定を行っていくなど、多くの経験を積むことが重要な取組であると考えております。

また、令和5年4月に施行されたこども基本法では、こどもの意見を表明する機会を確保することが明記されており、こども施策を進める上で、こどもに意見を求める機会は、今後、ますます増えていくこととなります。

このような時代背景の中で、今回、テーマとした特別活動は、学習指導要領に定められた教育活動の一つではありますが、特別活動を通して育まれる、人間関係形成、社会参画及び自己実現のための資質や能力は、将来を担うこどもたちにとって重要な財産になると考えております。

教育委員会においては、昨年度から、こだいら特別活動の日を設けております。そこでは、テーマについてこどもたちが話し合い、意見を出し合って合意形成を図り、それに基づいて児童・生徒が主体的に実践していく取組であると認識しております。

教育長及び教育委員の皆様が、それぞれの立場で特別活動に携わってこられた経験なども踏ま

え、これからの小平市の特別活動に対するご意見をお聞かせいただきたいと存じます。どうぞ、よろしくお願いいたします。

それでは、まず、事務局から説明をお願いします。

○寺本教育指導担当部長

それでは、「生きる力を育む 小平市のこれからの特別活動」につきまして、資料に沿って説明させていただきます。

まず、特別活動について説明させていただく前に、小平市で掲げているめざす将来像や人間像について、確認させていただきます。

小平市第四次長期総合計画では、めざす将来像を、つながり、共に創るまちこだいらし、基本目標として、1、人が育ち、学び、新たな価値を創造するまち、2、多様性を認めあい、つながり、共生するまち、3、自然と調和した、美しく快適で、魅力あるまちの3点を掲げています。

その上で、第二次小平市教育振興基本計画では、目指す人間像を、社会的に自立し、地域・社会に貢献しながら、他者と共生する人とし、自立、貢献、共生を掲げ、自分で考え、判断し、行動できる、地域や社会に愛着を持ち、自分にできることを考える、他者を認め、良好な関係を築くことを目指しています。

一方、学習指導要領においては、その解説の中で、特別活動で目指す資質・能力を育成するに当たり、1、人間関係形成、2、社会参画、3、自己実現が重要な意味をもつ視点として示されています。

このことから、小平市で掲げている目指す将来像や人間像と特別活動における3つの視点とは、つながっていると考えることができます。

そこで、小平市で目指す将来像や人間像に迫るために、小平市教育委員会では、特別活動の役割が重要であると考えています。

ここで、特別活動の学習指導要領上の位置付けについて、説明いたします。

小・中学校ともに、各教科、特別の教科 道徳、総合的な学習の時間、そして、特別活動、これに小学校は、外国語活動を加え、各校の教育課程が編成されます。年間標準総授業時数は、学年によって850時間から1,015時間となっております。その中で、特別活動の授業時数としては、小学校第1学年は34時間、それ以外の学年は35時間の学級活動が実施されています。

特別活動で行われる学級活動には、2種類の話合い活動があります。

一つは、児童・生徒が自ら課題を見だし、その解決方法などについて集団討議し合意形成を図る自発的、自治的な話合い活動。もう一つは、学級や学校の成員に共通する課題を題材にして、教師の指導を中心とした活動形態で、生徒が集団思考をして意思決定する自主的、実践的な話合い活動です。

次に、小平市における特別活動の推進の背景について、説明いたします。

まず、先ほど述べたとおり、特別活動の充実によって、小平市で掲げている目指す将来像や人

間像の達成に寄与すると考えました。また、特別活動は、教科書がないこともあり、特に学級活動の理解と実践には、学校、学級によって取組に差があること、特別活動における小・中学校の連携を図りたいこと、不登校やいじめを生じさせない環境づくりのための発達支持的生徒指導としての特別活動の推進が必要であること、コロナ禍において人と関わることに一定の制限があったことから、コミュニケーションの減少も課題となっていること等が挙げられます。

では、どのように、小平市全体で特別活動を推進してきたかを説明します。

市教育委員会では、特別活動を推進する意義等の理解促進のため、市内全教員対象の合同研修会等を行いました。さらに、市内への広報として、市内の教員や指導主事などで構成する、特別活動を推進するプロジェクトチームを設置し、学級活動指導案、学級会グッズなどの提供や、ポスターや「とっかつだより」の作成・配信などを行いました。「とっかつだより」は、学級会の進め方、教師の助言など、先生方が特別活動を取り組みやすくするための情報を掲載し、全教員へ Web 配信しています。

次に、特別活動の推進に向けた各学校の取組です。

市内でも特に学級活動の話合い活動に熱心に取り組んでいる小学校2校で、学級活動のモデル授業を公開しました。各校から教員が参観し、自校で還元して学び合いました。各学校からは、学校だよりやホームページなどを通じて保護者・地域に発信したり、校内での研究・研修に取り組んだり、端末を活用して資料等を教員同士で共有したりして、授業改善に取り組んでいました。

特別活動を推進する上で、市内の全校がそろって取り組めるように、こだいら特別活動の日を設定しました。これは、本年度で2回目の実施となります。6月第二土曜日に設定し、午前中には市内27校、約500学級で学級活動の授業公開を行い、午後には各小・中学校の代表児童・生徒による児童会・生徒会サミットを行っています。

午後に行っているサミットのテーマは、令和6年度は「自分も人も大切にできる学校づくり」、令和7年度は「自分たちが住む地域のために何ができるか考えよう」としました。

こだいら特別活動の日の目的は、人格的、社会的な自立を培い、自主的、実践的な態度をはぐくむ基盤となる特別活動の充実を図る、保護者、地域に、学級、学校経営についての理解促進を図る、児童・生徒が意見の違いを超え、よさを生かしながら合意形成を図ったり、意思決定したりする活動を通して、問題解決に関わる実践的な力を育てる、です。

そして、こだいら特別活動の日に期待することとしては、小・中学校における特別活動の充実、自分も人も大切にできる児童・生徒の育成、児童・生徒の自主的・実践的な態度の育成、児童・生徒の話合い活動の力の育成、児童・生徒の異年齢交流等による人間関係構築力の育成、教師の特別活動の指導技術の向上などを目指しています。

昨年度の児童会・生徒会サミット後に児童・生徒が提案・企画・運営した活動は、花いっぱい学校環境づくり、小中合同あいさつウィークの実施、小・中学校の授業交流、いじめゼロサミットの開催、人権集会の開催などに取り組みました。

ここからは、これまで小平市で特別活動を推進してきた成果と課題についてお話しします。

教員や校長先生から次のような声が届きました。

こだいら特別活動の日の設定で、市内小・中学校が同じベクトルをもって人権教育を推進することができた、ベテラン教員も改めて学級会のやり方を学べる機会となった、こどもたちが、意見することに抵抗感がなくなった、否定的な意見が減少し、相手の意見を受け止めるようになった、安定した学級経営ができるようになった、こども会議でいろいろな案が出され、実践できている、クラスメイト同士が温かく見守ったり、フォローしたりすることが自然に行動できるようになった実感がある。

課題としては、次のような声が挙がっています。

主題を各校で具体化していくことが課題である、児童会・生徒会サミットに向けて、もっと全校で指導を行い、準備した上で実施できれば、有意義な時間になると思う、などでした。

また、児童・生徒の声として、自分の意見を出し合い、よりよいものにしていくことの大切さを改めて学びました、それぞれの学校で言葉は違っても、目指している部分は同じようなものだった。生徒と町の人でよりよい小平市にしていきたい、地域について考えたり話し合ったりして、自分が地域のためにできることを、学校の代表として意見を言えたので良かったです、などの感想や意見が見られました。

次に、アンケート調査の結果からも成果を感じることができました。

調査は昨年度から3回行っており、調査対象は小学校4年生から中学校3年生までの児童・生徒です。6～7千人の児童・生徒から回答を得ています。

自分には良いところがあると思いますか、すすんで友達のよいところを見つけようとしていますか、というアンケート結果は、ともに割合が上昇していることが分かります。また、友達と違う考えだったとしても、自分の意見を伝えていますか、学級活動の話し合い活動で友達の意見に賛成したり付け足したりして、友達の意見のよさを認め生かしていますか、のアンケート結果についても、割合の上昇が見られました。この4項目を含めて、全部で10項目の質問がありましたが、いずれの項目でも割合の上昇が見られました。

今後の課題としましては、一定の成果が認められたことを踏まえ、持続可能な取組として実施していくことです。その上で、教員の指導力、校長の学校経営力の更なる向上、児童・生徒の健全育成と話し合い活動の力の更なる向上などに努めていきたいと思います。

私からの説明は以上となります。

○小林市長

ありがとうございました。それでは、皆様からご意見を伺います。

まず、阿部教育長職務代理者より、お願いいたします。

○阿部教育長職務代理者

阿部でございます。事務局からの資料説明ありがとうございました。

「生きる力を育む 小平市のこれからの特別活動」ということで、お話しさせていただければと思います。

個人的なことで恐縮ですが、私には1歳になる孫がおります。その孫が中学校3年生、15歳になる2040年、このまちの教育がどうなっているのか、これからの日本の小・中学校はどうなっていくのだろうということを、考えないといけないと思いました。

国は様々な施策を出していますが、今と2040年の大きな違いとして、人口が挙げられます。15歳の人口でみると、昨年は約106万人、それが2040年の1年前で、約68万人とされています。ものすごい勢いで少子化が進んでおります。この数字は、今後増えることはなく、既に15年後の私の孫の同級生の数は確定しています。

次に2040年の中学校3年生の学級の様子を想像してみます。先日参加した講演会の資料によると、40人学級の教室で机を並べているとします。40人のうち、ギフテッドといわれる特異な才能のある生徒が2.3%で0.9人。将来Jリーガーになるようなこども、つまり、吉本委員のような方が当てはまります。学習面又は行動面で著しい困難を示す生徒は5.6%で2.2人。家にある本の冊数が少なく学力の低い傾向がみられる生徒が39.2%で15.7人。不登校の生徒が6.7%で2.7人。不登校傾向のある生徒が10.2%で4.1人。不登校と不登校傾向の生徒を合わせると7人になります。外国にルーツをもち、日本語を家であまり話さない生徒が3.2%で1.3人。このような生徒を合わせると27人となり、40人学級において27人がいずれかの生徒に該当することとなります。何も該当しない生徒は13人しかいません。今までの日本の教育は、この13人を通常としてターゲットを当てて教育を展開されていたのですが、2040年には色々な配慮をもって教育に当たらなければならないということが明らかになっています。

昨年、次期学習指導要領について文部科学大臣から諮問があり、それを受けて、中央教育審議会では審議を重ね、この秋に論点整理、つまりたたき台を出したところです。現在は、それをもとに各教科等のワーキンググループで具体的なことを審議しており、来年度には答申が出される予定です。

そのたたき台の中から、私は、次期学習指導要領における重要な改定の柱が三つあると考えています。

一つ目の柱は、カリキュラム・マネジメントです。今は、北海道から沖縄までどこの小・中学校でも金太郎飴のように教える内容や授業時数が全て同じですが、2040年においては、地域や学校ごとに、時間割や学習内容を変えてもよいという方向性に進むということ。

二つ目の柱は、生成AIをはじめとした情報教育の推進です。令和3年度に小平市教育委員会の事務局から各学校に新しいパソコンが配付されました。非常にうれしく思ったことを覚えています。パソコンを教室で配ったところ、こどもたちの目がキラキラしていました。そのように与えられたパソコンを、文房具の一つとして使いこなす力をこどもたちにつけさせながら、個に応じた教育をするということ。

そして三つ目の柱が、特別活動の推進であると考えます。

2040年の学年や学級の状況を踏まえると、個に応じた指導ももちろん大事ですが、様々な特性や背景をもつこどもも、みんなで一緒に前に進んでいこうという考え方、つまり、多様性の包摂がとても大事だということが言われております。

そのためには、個々のこどもに対する丁寧な対応も必要ですが、学年や学級という集団を基盤として、一人一人の成長を支える特別活動が、これからの教育には大きな柱になると考えております。

小平市で校長職として勤務した期間、毎年10月頃になると、卒業給食といって1班6人程度のこどもたちと一緒に校長室で給食を共にしました。コロナ禍のときも透明なシート越しに色々な話をしながら過ごしたことを覚えています。一人一人と話をする中で、中学校時代の一番の思い出は何ですかという質問に、一番多かった答えは部活動でした。そして、それと双璧なのが特別活動であり、運動会や修学旅行、ルネこだいらでの合唱コンクール、それらが思い出に残りましたと、多くの生徒が言っていました。

ある女子生徒の話が印象に残りました。その生徒が、「私は中学校2年生の合唱コンクールがとても思い出に残っています。」と言っていました。その生徒はピアノが上手であったため、伴奏を担当していましたが、中学校3年生の合唱コンクールで優勝したものの、中学校2年生のときは優勝をしておらず、入賞もしていません。そこで、「なぜ中学校2年生の合唱コンクールなのですか。」と尋ねると、「私は伴奏者で、そのとき大失敗してしまいました。いつも意地悪でちょっかいを出してくる男子生徒が、そのときは何も言いませんでした。むしろ、頑張れという言葉をかけてくれて、私はそれが今でもうれしくて心に残っています。」という話をしてくれました。これは、学級を育てる、集団を育てるという視点において、日頃の学級活動の成果であると女子生徒の話を聞いて思いました。

修学旅行で奈良の大仏を見てその大きさにも感動するのですが、それ以上に自分たちで集団のルールや決まりごとを作って、自分たちがそれらを守って頑張ったという思い出が、いつまでも心の中に残るのだと思っております。

最後に、教育委員会と学校の関係というのは、商店街とお店の関係に似ているなど感じるときがあります。商店街の教育委員会が方向性や環境を整えた上で、店主の校長がその教育委員会の方向性に従って責任をもって店を経営して繁盛させていくというものです。小平市の教育はこういうスタイルであるということを教育委員会が明確に打ち出すことによって、校長に意識付けをし、学校経営力を伸ばしてもらえるような働きかけを我々がしなければならないと思っております。

教育委員会がリーダーシップをとり、特別活動を市の施策として位置付けることは、これからの小平のこどもたちの姿を見据えた極めて有効な選択であると考えます。

○小林市長

ありがとうございました。

冒頭で具体的な数字を示していただいたことで、2040年の教室の中の様子が頭に浮かんできました。現状でも、困難を抱えているこどもたちが各教室にいて、彼らを先生が支援しきれずに学級崩壊につながってしまうという話を聞くこともございます。そうした中で、今後困難を抱えるこどもたちの人数がクラス当たり27人になったときに、どのようなクラス運営をしていくのかということは、個々の先生の力だけではとても対応できるものではないと思いました。

個々に丁寧に対応していくという部分と学校や学級の運営という部分で、小平市として総合力を高めていく必要があるのではないかとすることを改めて思いました。その上で、特別活動が鍵になってくるところは、お話いただいて大変よかったと思っております。

多様性の包摂についてももう少しお話を伺いたいのですが、具体的にはどういうことでしょうか。

○阿部教育長職務代理

一つの学級の中に、先ほど申し上げた、家で日本語を話さないこども、家にほとんど本がないこども、また、特異な才能を持ったこどもなど、様々なこどもたちがいます。このようなこどもたち以外にも、それぞれのこどもたちに様々な背景や個性があります。

40人の中で授業を受けることや、行事等様々なことを行う上では、こどもたちを一人も取りこぼさずにまとめあげて、我々教育者が方向性を示すことが大事であると思っております。

こどもたちには様々な違いがありますが、そのことも包摂して、小平市として前に進んでいければと思っております。

○小林市長

ありがとうございます。

○青木教育長

少し補足をいたしますと、今、学習指導要領の改訂作業が進んでおりますが、先ほど阿部教育長職務代理者がおっしゃった論点整理の中で、次の学習指導要領に向けた検討の基盤となる考え方というのが3点示されております。そのうちの一つが、多様性の包摂です。内容はお話しされたとおりですが、様々な背景を有するこどもが多くなっているという実態に向き合うということと、このような多様性を個人や社会の力に変える観点から、一人一人の意欲が高まり、可能性が開花し、個性が輝く教育の実現を目指すものであると国として示しております。それが、15年後のこどもたちの教育の柱になっていくということを感じております。

○小林市長

補足いただきありがとうございました。まさに、特別活動が一つの柱になるのかなと思ってお

ります。

阿部教育長職務代理者から、こどもたちは、運動会や合唱コンクールといった特別活動がとても思い出に残っているとおっしゃっていただきましたが、私もこどもを育てた経験において、こどもやこどもの友達などと話をすると、やはりこのような特別活動が思い出に残っているのだらうと思っていました。

私の家族のことですが、先日、私の息子が高校の合唱コンクールに参加しました。合唱コンクールは中学校でとても良い思い出があったようで、高校で初めての合唱コンクールということもあり、力を入れて臨んだようです。私は当日聴きにいけなかったので、知人が撮影したビデオを見たのですが、上手とは言えない出来でした。このビデオを息子に見せたところ、息子は「あれ、下手じゃない。」と言い、その後、「中学校のときの指導がすごかったんだね。」と振り返っていました。

中学校での音楽の先生の高いレベルの指導の上で、クラス一丸となってこどもたちが頑張っていたので、学校全体のレベルが大変高かった。その中で、優勝を争って切磋琢磨していたため、中学校の合唱コンクールは非常に思い出深かったのだと思います。改めて、中学校の合唱コンクールの凄さや、取り組んだ自分たちの頑張りを息子が振り返っていたことを思い出しました。

一方、こどもたち一人一人、様々な特別活動に思い入れがあると思うのですが、やはり、引張っていく先生が大変なのかなと思っております。その意味においても、こだいら特別活動の日を設けていただいたことにより、先生同士が特別活動をどのようにやっていけばよいかを学び合えることとなったということは、大変良かったと思っております。

それでは、続きまして望月委員よりお願いいたします。

○望月委員

このような機会を設けていただきまして、どうもありがとうございます。

今回は、「生きる力を育む 小平市のこれからの特別活動」というテーマですが、その内容を考える前に、小学校や中学校が一つの社会であることをまず理解すべきだと思います。その社会を学ぶという前提の中で、学校の運営や活動の一部として特別活動があるのではないかと考えております。特別活動を通じて、こどもたちは様々な体験や経験をしながら、社会とは、みんなで話し合いながら作り上げていくものだということを学ぶことができると思います。こうした機会を通じて、実際に社会を形作るプロセスを感じ、学ぶことが、非常に重要だと思っています。

私は中学校や小学校において、将来設計の授業の一環として、お金に関する授業を担当する機会があります。その授業を通じて、こどもたちが社会の一員であることを認識するのはもちろん、その中で自分自身がどんな夢を持ち、どんなことをしたいのかを考え、実現していけることも重要だと思います。生きるって楽しいな、こんなことができる自分が楽しい、と感じることが、大切であると思います。社会の一員としての役割を果たすことは重要ですが、それと同時に、自分自身が個として輝くことも非常に大事だと思っています。

保護者の視点として、子どもたちを取り巻く環境が大きく変化していると感じます。人との関わりに不安を抱えたり、自分に自信を持てなかったりする子どもたちが増えているように感じます。また、全体的に、家庭や地域で、異なる世代と関わる機会が著しく減少しているとも思います。一方で、情報量は非常に多くなり、社会の変化も激しくなっていると感じられます。そのような状況の中で、将来を思い描くことが難しいと感じる子どもは増えております。高校を卒業した後、大学に進学した後、あるいは就職のことなどについて、どうしたらよいのか分からず思うように動けないと悩んでいる方も少なくないのではないかと思います。

このような背景の中で、小平市が特別活動を通じて、話し合う力や他者を認め合う関係づくりを大切にしていることは、単に学校生活をより良いものにすることだけではなく、子どもたちが将来どのように生きていくかを考えるための土台を育てる、とても重要な取組であると感じています。学級活動での話し合い活動を通じて、子どもたちは安心して自分の意見を伝えたり、友達の考えを聞いて受け止めたりする経験を日常的に積み重ねています。このような経験は非常にすばらしいことだと思います。

また、自分の考えが認められた経験や、意見が違っても話し合いによって解決できたという実感は、子どもたちに自分の存在や考えが重要で、自分そのものに意味があると感じさせ、自分を大切に思う気持ち、つまり自己肯定感につながると考えています。この自己肯定感は、将来の進路や生き方を考える際の大事な出発点になると思います。

子どもたちが、自分には考えて選ぶ力がある、自分の選択を信じて良いのだと感じられるようになるのは、自分自身の将来設計を描く上で欠かせない力だと私は思います。

一方で、少し気になるのは、学びや行事などの取組が一時的で終わってしまわないかということです。その場合、将来につながる力として十分に身につかない可能性があります。やはり、そうした取組は、継続的に行われることが重要だと思います。一時的には良い影響があると感じたとしても、もしそれがイベントなどの形でしか存在せず、継続されなければ、元の状態に戻ってしまうおそれがあります。継続的に学びの機会があることは、とても重要だと感じています。つまり、考えて、決めて、行動して、そしてその結果を振り返るというプロセスを、特別活動の中で身につけていくことは、非常に重要だと思っています。

分かりやすい例で申し上げますと、修学旅行では、行く場所や時間などの計画を立てて実際に予定どおりに回れたのか、予定どおりにいかなかった部分は何だったのか、もっとできることはないのか、といったことを考える機会があります。このような振り返りは修学旅行だけでなく、他の活動でもできるのではないかと感じています。運動会でも同じように、生徒自身が企画や運営を行い、それをみんなで実践して結果を振り返るという流れがあると良いと思います。運動会では怪我などのリスクも伴いますので、フォローの体制をしっかりと整える必要がありますが、いずれにしても、生徒が主体的に企画運営できる場がもっとあると良いのではないかと考えています。

特別活動についてですが、人間関係を育むという点で、将来設計に大きく関わっていると感じ

ます。学級活動や児童会・生徒会活動などを通じて役割を担うことで、相手を大切にしながら関係を築く経験を得ることができます。将来どのような進路を選んだとしても、人と関わりながら社会で生きていくことは避けられません。そのため、学校生活で安心して人と関わる経験を積み重ねることは、将来の社会生活を支える重要な土台になるのではないかと考えています。

児童会・生徒会サミットなどでの異年齢交流や役割分担の経験を通じて、こどもたちが、自分にも果たすべき役割があるという実感を持てるようになるのではないかと思います。役割を任される中で、うまくいった経験だけでなく、思いどおりにいかなかったことも含めて振り返りを行うことで、自分の行動を見つめ直し、次に生かそうとする力が育っていくと考えます。結果が良かったことだけでなく、もし失敗したとしても、その後どうするかを考える振り返りがとても重要だと思います。実際の活動において、この振り返りを重視し、それを通じてこどもたちが成長できるような特別活動を期待しています。

特別活動で身につけた力は、学校内だけでなく、家庭や地域との関わりにもつながっていくものだと思います。つまり、こどもたちは、自分は多くの人に支えられて生きているという実感を得られるのではないかと思います。さらに、特別活動の経験を通じて、地域や社会とのつながりや家庭の役割に気付くこともあります。それによって、社会に生かされているという視点を知りきっかけとなり、こどもたちが、社会の中でどう生きるべきか、どのように人や社会と関わっていきたいのかを考える重要な学びとなるのではないかと思います。このような視点を育てることが、特別活動の大きな意義であると思います。

終わりに、特別活動を通じて育まれる自己肯定感、人との関わり方、社会とつながろうとする姿勢は、こどもたちが将来を主体的に考えるための大切な土台になると思います。この活動は、進学や職業といった具体的な進路だけでなく、どのように生きていきたいか、どのように社会と関わっていくべきかを考える力を育む上で、非常に重要な学びとなると感じています。また、このような観点から考えると、学校、家庭、地域が連携しながら、こどもたち一人一人が自分らしい将来を描けるよう、今後も小平市の特別活動が更に充実していくことを心から期待しております。

○小林市長

ありがとうございました。

特別活動の意義などについてお話しいただきました。

望月委員は将来設計の授業をされているとのことですが、具体的にどのような内容を教えているのか、詳しく教えていただけますか。

○望月委員

授業では、児童・生徒に30歳になった自分を想像してもらい、こどもが二人いる状況と仮定して、家をどうするか、どこに住むのかといったことを考えてもらいます。さらに、こどもたち

の進学プランや家族でやりたいことなども考えてもらいます。そうすると、これらの実現にはお金がかかることに気付くわけです。

その上で、自分がどう生きたいのか、どのような計画をするのかを具体的に考え、それににかかる費用とともにプランを立ててもらいます。そして、そのプランが現実的に達成可能かどうかを検討し、必要であれば修正を加えながら計画を進めていくという流れです。

この授業を通じて、児童・生徒は、自分の家族が自分のことをどれほど考えてくれているのかを知ったり、計画を立てることの重要性、あるいはお金がこれほど必要なのかという現実を学んだりします。その学びにより、家族への感謝の気持ちや、今勉強を一生懸命する大切さについても考えるきっかけになっています。そういったことに気付いてもらえる授業を行っています。

○小林市長

対象は何年生ですか。

○望月委員

この授業は、小学校6年生と中学校3年生に行っています。卒業式の前に行うことが多いです。

○小林市長

お金の考え方が授業のベースにあるかもしれませんが、それを通じて、自分たちがどんな生活を送りたいのか、将来どんな夢を持ちたいのかといった点につながる内容だと感じました。

こどもはふだん、自分にどれくらいお金がかかっているかを考えず、親もその具体的な事情を教えることはあまりないと思います。例えば、自分の年収や家庭の借金、ローンの話などをこどもに話す親は少ないのではないかと思います。

しかし、本来、将来を考える上ではそうした話題も重要ではないかと感じました。また、お金についての話だけでなく、自分がどんな将来を送りたいかについて、言葉にして話したり紙に書き出したりすることも大切だと思います。こうした取組の中で、特別活動の内容ともつながってくる部分があるのではないかと感じています。

特別活動に関する課題についてもお話をいただきました。継続性や振り返りが重要だという点で、具体的な課題を示していただきました。一度のイベントだけで終わるのではなく、先生方が工夫を重ねながら継続的に取り組んでいただいているのだと思います。振り返りが大切だという点については、例えば失敗したことに対してただ落ち込むだけでなく、どう改善していけばよいのかを考えることにつながります。このプロセスは、大人になってからも生きる力になると思います。ありがとうございました。

それでは、続きまして吉本委員、よろしくお願いいたします。

○吉本委員

小林市長にはこのような機会をいただきありがとうございます。事務局の皆様も説明ありがとうございます。

私からは、特別活動について大きく分けて二つの観点からお話しさせていただきます。一つ目は、これまで教育委員として小平市の特別活動を見てきた中での感想、二つ目は、本日のテーマである「生きる力を育む 小平市のこれからの特別活動」についてです。

一つ目の、小平市の特別活動を見てきた中での感想ですが、学級活動における話し合い活動についてお話しさせていただきます。

こどもたちが集団討議し、合意形成を図ること、集団思考し意思決定をしていくこと、これは社会に出た後も確実に求められる力だと思っています。こうした力を児童・生徒の段階から経験して積み重ねていくことは、非常に重要なことだと感じています。その象徴的な取組として、こだいら特別活動の日が挙げられます。令和6年度のテーマは「自分も人も大切にできる学校づくり」、令和7年度のテーマは「自分たちが住む地域のために何ができるか考えよう」でした。学校の中から始まって、次に地域へ視野を広げていく。このテーマ設定は、非常に継続性があるって意義深いものだと感じました。当日の様子を見させていただくと、中学生がリーダーとなり小学生が中学生に引っ張られ自分の意見をきちんと伝えるという姿が見られ、双方にとって非常に良い経験になったと思いました。また、先ほど示されたアンケート結果においても、自己肯定感や他の人の良いところを見つけるという力がすべて右肩上がりですべて推移しているという点は、本当にすばらしい成果だと受け止めています。

一方で、その後の学校訪問を通じて感じているのは、それをしっかりと他の児童・生徒にも共有し継続的に実践できている学校と、一時的になっていてこれから取り組んでいく段階の学校があるということです。今後は話し合いの場で終わるだけでなく、そこで出た結果を各学校に持ち帰って、地域の中で実践していくというところまでぜひ進めていってほしいと考えています。

二つ目は、「生きる力を育む 小平市のこれからの特別活動」についてです。

私自身は、これまでサッカーに人生の多くの時間取り組んできました。幼稚園から、プロサッカー選手として大人になってからも、サッカーを通じて生きる力をたくさん学べたと実感しています。その経験を学校生活に置き換えて考えたときに、スポーツや運動という観点から運動会と非常に似ていると思いました。したがって、運動会の特別活動の価値についてお話しいたします。

運動会は、単に体力や順位を競うだけの行事ではなく、生きる力を体で学ぶことができる特別活動であると考えています。その中で、私は運動会には大きく四つの価値があると考えました。

一つ目は、みんなが同じ目標に向かう経験ができることです。運動会では勝ちたい気持ちもあれば、運動が苦手な児童・生徒は不安な気持ちがあります。その中で、クラスや学年でどうやったらうまくいくのかを話し合い、そして実行し、振り返る。この一連の流れにより、同じ目標に向かって動くというすばらしい経験ができると考えています。

二つ目は、得意不得意に関係なく、一人一人に様々な役割があるということです。走るのが得

意な児童・生徒だけではなく、集団種目や運動会の準備、放送、応援、それぞれの役割を任され、自分も必要とされていると感ずることができるようになります。

三つ目は、うまくいかない経験をみんなで乗り越えることです。転んだり、リレーでミスをしたり、負けるといった失敗を、声をかけ合い、振り返りながら乗り越えることで、失敗しても受け入れられる集団の安心感を、体を通して学ぶことができます。

四つ目は、学校と地域が自然につながることです。運動会には準備や応援を通して、多くの保護者や地域の方が手助けしてくれます。こどもたちは自分たちが一人で成長しているのではなく、多くの大人、保護者、地域の方に支えられているということを実感でき、それを学ぶことができます。

以上のとおり、運動会は、人と協力すること、失敗しても立ち直ること、自分の役割を果たすこと、保護者、地域の方とつながるということを体で学ぶ、非常に価値の高い特別活動と考えています。だからこそ、これからの時代においてますます大切な学びであると私は考えているので、運動会を「生きる力を育む 小平市のこれからの特別活動」として、ぜひ大切にしていってほしいと考えています。

○小林市長

ありがとうございました。

学校訪問を通じて実感した、今後の特別活動や、こだいら特別活動の日に関する課題についてお話いただきました。話合いがその場で終わるのではなく、それを学校に持ち帰りどう生かしていくかというところが、これからは重要になるのだろうと考えております。熱心に取り組む学校とやや後回しになってしまう学校があるとのことでしたが、小平市としてこう進めるという方向性を、教育委員会と市が力を合わせて示していくことで、市全体のレベルアップにつながるのではと思いました。

吉本委員に伺いたかったのですが、サッカー選手はよくミーティングをされますが、サッカー選手の場合、チームメンバーであると同時にライバルという関係性もあります。勝利を目指すチームとしての話合いの場において、個々の主張ばかりにならないように、チーム全体を考えたミーティングを行う際、どのような点に配慮していますか。

○吉本委員

サッカーでは、選手それぞれがやりたいプレーや得意なプレースタイルが異なりますが、チームとして勝利を目指すために、監督やクラブがその方法を示してくれます。その上で、自分たちの正解は何なのかという問いに対して、チームの中で正解を作り上げていくために話し合います。こうした話合いは、先ほどお話しした集団で討議し合意形成を図るということであり、必ずしも自分がやりたいプレーや得意とするプレーが選ばれるわけではありませんが、チームが勝つために何が必要かを基準にして、意見を出し合って進めていく場がミーティングです。

○小林市長

一定程度、私はこうやった方がいいと思うというような主張はあると思います。そのような主張がぶつかる中で、どのように合意形成されますか。

○吉本委員

最終的には、監督が、この場面ではこうするべきだとはっきりと言ってくれます。そうしたことがないと、結果論に終わってしまいます。しかし、監督やクラブが、これが正解だというクラブやチームとしての方向性をしっかり示してくれることで、たとえ結果が異なったとしても、その正解のもとに進むことができます。

個々の選手は主張が強くそれぞれやりたいサッカーがあるため、グラウンド上での言い合いなど、衝突が起きることもありますが、勝利を目指す姿勢は全員同じです。そのため、目標達成に向けて、一番の正解を見つけるための話し合いが行われています。

○小林市長

ありがとうございます。

運動会を例に挙げてお話いただきました。目標を設定することや、互いに協力し合うこと、失敗が許容されるということや、人とつながることの重要性もお話いただきました。しかしながら、失敗したときにはつい、君のせいだと責めたくなくなってしまうことがあります。そんな状況に直面したとき、どうやってそれを乗り越えればいいのか、何かアドバイスはありますか。

○吉本委員

それをどう受け止め、どのように次に生かすかということが、とても重要だと思います。サッカーの例でいうと、勝つためには、自分がしてしまった失敗、つまりミスは次回は繰り返さないようにどうすべきか、ということが大事になります。

私自身も、怪我で苦しかったときやサッカーでミスをしてしまったときには、顔の見えない相手から誹謗中傷を受けたりして、とてもつらい思いをしました。ただそんなとき、仲間が支えてくれることが救いでした。ミスをして落ち込んでいる私を仲間が食事に誘ってくれたり、声をかけて励ましてくれたりしました。

ミスをしたこどもも、大丈夫だよ、という言葉をかけてもらうことで、立ち直ることができます。自分自身のためだけではなく、家族や応援してくれる人たちのために頑張ろうと前向きな気持ちになれます。そうした気の持ち方が、困難を乗り越え立ち直るための大切な方法だと思っています。

○小林市長

ありがとうございます。

集団というのは時として怖い存在になることもあります。先ほど触れていただいたような集団の安心感、つまり、失敗しても許容される、この環境なら全力で取り組めるというような雰囲気は、やはり目指すべき姿なのだと改めて感じました。

それでは、続きまして川辺委員、よろしくお願いいたします。

○川辺委員

このような機会をいただきまして、小林市長及び事務局の皆様に変感謝申し上げます。

先ほどの阿部教育長職務代理者のお話や、吉本委員のお話ともつながる内容ですが、まるで自身のことを言われているように感じました。

まさに私の人生の原点は合唱コンクールで、ピアノ伴奏を担当した中学生の頃のことです。私は今、音楽の仕事をしていますが、中学生の頃は時間さえあればひたすらピアノの練習に取り組んでいました。

3年時のコンクールでは、在籍したクラスが優勝するために、自分が頑張らねばという思いで、毎日練習を重ねていました。しかし、本番では、それまでミスしたことがなかったのにも関わらず間違えてしまい、一瞬演奏が止まってしまいました。賞は無事に取ることができたのですが、そのショックは大きく、演奏が終わった後、クラスの皆からは励ましの言葉をもらったり、率直な意見を言ってもらったりしました。この経験がきっかけで音楽の高校に進みました。改めて思い返すと、私自身も特別活動から今の自分がスタートしています。とても懐かしい気持ちになりました。

私は昨年10月1日付けで委員に就任して、丸1年が経過しました。様々なことを学ばせていただく日々の中でも、とりわけ、小平市の教育において特別活動に力を入れており、今年初めて参加させていただいたこだいら特別活動の日では、市内全ての市立小・中学校の代表が集まって、児童会・生徒会サミットという先進的な取組が行われ、各中学校で活発な話し合いを経て意見を発表する姿に、深く感銘を受けました。私は議題や結論はもちろんのこと、その結論に至る過程、自分の意見や思いを話すこと、他者の意見を聞くことが、とても重要なことであると思っています。他人と関わって、その存在や意見を認め、社会で生きる力を育む特別活動は、勉強や教科と同じくらい大切なことであり、私自身本当に好きな学びで、今も心に残っているものは、先程もお話したようにやはり特別活動であったと思っています。

また、私が小学校6年生のときの担任の先生が、司馬遼太郎さんという作家の方とやり取りをされていて、授業では司馬遼太郎さんの本を読んでお手紙を書く、さらにそのお返事をいただくという活動に取り組んでいました。この授業は先生のライフワークでもあったようで、私たちも、すごい作家さんに手紙を書くのだからと、文章の書き方や言葉遣いを徹底的に教えられました。その時の経験と学んだ内容は、今でもとても役立っていると感じます。

このような自身の思い出を踏まえつつ、また、親としての視点や市民としての視点を加えながら、小平市の特別活動について三つの提案をさせていただきます。

一つ目は、ダイバーシティを推進する特別活動についてです。私は、コロナ禍で緊急事態宣言が出されていた2020年、中学校のPTA会長をしていました。その期間中、誰もいない寂しい学校の校舎の中で、どうすれば会議ができるのか、どうすれば皆がつながりを保てるのかを必死に考え、様々な方法に挑戦してきました。その経験は、今でも鮮明に夢に見るほど印象深く、この1年間の学びはある意味で私にとっての「特別活動」だったと感じています。

現在では、皆が一堂に会して集まることができる状況が戻りましたが、コロナ禍を経て得た経験、様々な方法でつながることができるようになったことは、今こそ生かすことができると思います。例えば、クラスで話し合い活動を行う際、不登校のこどもや体調不良のため学校に来られないこども、教室に入れないこども、朝が起きられないこどもなど、様々な状況の児童や生徒がいる中で、オンラインでの参加やチャットを活用した意見交換も可能だと思います。また、その場で意見や発言をしてもしなくてもよく、どのような形でも参加できることそのものが大切だと思います。そして、自分が話し合いの場にいることや、他者の存在を認めること自体が重要だという認識を持つことができる活動を、これから更に進めていけたらと考えています。

二つ目は、特別活動の周知です。特別活動って何ですか、と保護者や地域の方々に尋ねてみたとき、どれだけの人がすぐに答えられるでしょうか。例えば、学級会、生徒会、委員会、運動会、入学式、修学旅行、職場体験などの具体的な例を挙げると、「ああ、そういうことか。」と理解される方は多いと思います。そのほか、八ヶ岳や日光での校外活動など小平市内の小・中学校で取り組まれている特別活動を、保護者や地域の方々に周知していくことが重要だと考えています。

例えば、PTAやコミュニティ・スクールの知恵を借りながら、先日行われた児童会・生徒会サミットのような場を、学校単位で地域ごとに設けるのも良い方法だと思います。防災や安全、バリアフリーなど、地域で関心の高いテーマを取り上げ、手紙やポスターなども児童・生徒が作り、家族だけでなく地域の方々にも周知します。このように、学校で行われている活動を知ってもらえるような機会をつくることも重要です。こうした取組が、特別活動の広い周知や学校への理解を深めるだけでなく、地域コミュニティの醸成にもつながるのではないのでしょうか。

三つ目は、学校から飛び出し、地域と関わる特別活動です。先ほど申し上げた地域コミュニティの醸成は、前回の総合教育会議のテーマでしたが、これは特別活動と非常に親和性が高いと考えています。学校の特別活動を、地域社会の縮図として捉えたとするならば、地域コミュニティは、拡張された特別活動として位置付けることが可能ではないかと思っています。

私は音楽を通じて地域と関わるが多いため、音楽を例に話します。たとえば小平市では、毎年12月の障害者週間に合わせて、みんなでつくる音楽祭 in 小平というイベントが、中央公民館で開催されています。この音楽祭は、ボーダレスを掲げたイベントであり、ダイバーシティの推進にもつながる素晴らしいイベントだと思います。

学校の特別活動の一環として、地域と音楽を通じて対等に関わり合い、世代を超えて居場所と

なるようなイベントがあれば、非常に面白いのではないのでしょうか。例えば、もし話合いや言葉によるコミュニケーションが苦手なこどもでも、音楽を通じて、思いを込めることや表現することができるかもしれません。学校や他者との関わりが少し苦手なこどもでも、音楽を通じて、楽器や声で心を合わせることができるかもしれません。また、他人が奏でる音も美しいと受け入れられるかもしれません。日頃から、スポーツや音楽、勉強など、自分が得意なことで他者に認められるようなことが一つでもあるということは武器になり、自己肯定感の向上につながると考えます。自己肯定感を大切にすることが、こどもたちの心を育てていくことになると思います。

このように、学校の内外、地域に目を向けても、様々な経験が特別活動となり得るし、特別活動と捉えることができると思います。他者と関わるたくさんの経験がこどもたちの宝となり、また、こどもたち自身が地域の、社会の宝だと思います。宝物のようなこどもたちの自己肯定感を育む特別活動は、より良い人をつくり、つながり、共に創るまちこだいらの核となっていくと確信しております。

○小林市長

ありがとうございました。

コロナ禍のときの話をしていただきましたが、具体的にどのようにつながっていましたか。

○川辺委員

緊急事態宣言が発令され学校に行くこともできず、集まること自体が非常に難しかった中で、どうすれば家庭同士が孤立せずつながることができるかを考える必要がありました。私が以前住んでいた国分寺市の学校では、当時は手紙でのやり取りしか方法がありませんでした。そこで私は、メールシステムの導入を試みることにしました。後で何か言われるかもしれないとは思いましたが、まずは実行してみることを優先しました。

このメールシステムにより、PTAや学校からのお知らせが全ての家庭に確実に届くようにしました。さらに、各家庭からご意見や情報が共有できるような仕組みとして、チャットルームのような機能も利用しました。つまり、Web上でつながる環境をつくる取組を行いました。

また、会議が開催できない状況を克服するために、オンライン会議ツールであるZOOMを活用し、会議を進める試みも行いました。

現在では当たり前になっているシステムですが、当時の導入は苦勞しました。このように、今できることをとにかく実践し、みんながつながる、ということに焦点を当てて活動しました。

○小林市長

ありがとうございます。

コロナ禍においてICTを活用することで人々がつながることができた点については、とても

良かったと思っています。また、川辺委員がおっしゃったように、学校の近くに住んでいてこどもがいない地域の方々が、どのように学校と関わるかを考えることは重要だと感じています。私自身も学校の近くに住んでいますが、「学校に行くきっかけがないが学校に行ってもよいかな。」と質問されたことがありました。もちろん、用がなく学校に行くわけにはいきませんが、特別活動や学校が地域と協力して行うイベントなどがあることで、地域の方々が学校に足を運ぶきっかけになり、新しいつながりが生まれる場になるのではないかと考えています。イベントを地域の方と一緒にやっていただくことや、それぞれの学校で特別活動の日を行うことなどにより地域と連携した学校づくりが可能になると改めて思いました。

それでは、最後に、青木教育長よろしく願いいたします。

○青木教育長

小林市長には、第2回小平市総合教育会議を開催していただき、小平市で推進している特別活動に焦点をあてて市長と教育委員会とで協議・意見交換を行うことができ、誠にありがとうございます。私からは、教育委員の皆様のご意見等をまとめながら、自分の考えなどを述べさせていただきます。

まず、特別活動の役割についてです。

特別活動は、なすことによって学ぶということをその方法原理として、様々な集団における体験的、実践的な活動を中心とする学習活動です。そうした学習によって、人間関係の構築や社会への参画、自己の実現といった一人一人の人格形成、人間形成を目指す、重要な役割を担っています。

それぞれの委員からのご意見にもありました。阿部教育長職務代理者からは、学校行事は一生の思い出にもなる学習であると、望月委員からは、将来設計に深くかかわる学習であると、吉本委員からは、運動会では四つの点から学べるものがあると、そして川辺委員からは、合唱コンクールが自身の人生の原点であったと、それらのお話をありがたく受け止めさせていただきました。特別活動には、こどもたちの心と体の成長に資する様々な活動内容や活動形態があって、それが人としての生きる力、礎となることが期待できると考えています。

小平市では、特別活動の学習の柱の一つとして、自分の意見も人の意見も大切にする学習に重点を置いた話し合い活動の充実に力を入れています。その学習を通して、こどもたちが人の意見を大切にしながら、自分の意見を主体的に述べる機会の創出にもつながると考えます。

こうした特別活動の推進が、小平市第四次長期総合計画において描かれている、様々な違い、多様性を越えて、互いを尊重し、自分らしく活躍することなどのありたい姿の実現に資することが期待されます。

次に、特別活動の課題についてです。事務局の説明や委員からのご意見にもありましたように、特別活動の実践には様々な課題があります。その課題を解決し、小平市のこどもたちの成長につながっていけるように取り組んでいます。また、こうして市内全校が同じ方向性をもって取り組

むことで、9年間の一貫した教育活動を実現できると考えています。望月委員からも、持続可能性が大切だご意見をいただきました。

しかしながら、教員には都内全域を対象とした人事異動がありますので、数年で多くの教員が入れ替わることになります。教育委員会の事務局職員にも人事異動があります。その上で、持続可能な教育実践のためには、小平市、そして教育委員会が掲げる将来像や人間像に向けた、ぶれない取組姿勢が重要であると考えています。

それでは、ここからは、本日の主題である、小平市のこれからの特別活動の在り方についてまとめたいと思います。

まず、学習指導要領における特別活動についてですが、学習指導要領は、おおよそ10年に一度改訂されます。現在、文部科学省では、次の学習指導要領の改訂作業が進められています。阿部教育長職務代理者からもご紹介があったように、国の諮問機関である中央教育審議会で審議される中で、9月に、論点整理として方向性が示されました。

そこでは、次期学習指導要領の基本的な考え方として、自らの人生を舵取りする力と民主的な社会の創り手の育成と示されています。その上で、特別活動を中心とした主体的な社会参画に関わる教育の改善が必要であると示されています。このことから、次期学習指導要領において、特別活動が期待されていると捉えることができます。阿部教育長職務代理者からも丁寧にお話しいただきました。また、課題として、こどもの意見を授業や教育課程に生かす仕組みや指導技術などの未熟さ、こどもを社会の一員として受け止め、その意見を政策や社会の仕組みづくりに生かす地域・社会の受け皿の不足を挙げて、学級、学校をフィールドとして、こどもたちの意見表明や合意形成の機会、参画の機会をより充実させる余地がある、と示されています。

ここで、本市の特別活動の取組について振り返ってみると、いずれの学校においても、多数決によらない合意形成や一人一人の意思決定ができる話し合い活動に向けて、先生方が学び、こどもたちに指導できるよう努めています。その結果として、学級活動の授業公開や、こだいら特別活動の日の開催が挙げられると思います。その成果は、冒頭で事務局からの説明や各委員からのご意見にもありましたとおりです。しかしながら、まだ枠組みができたところで、これから各学校が実践を積み重ねていくことが必要です。それは、吉本委員が、まだ学校によって取組に差があると述べられていたように、学校での積み重ねが大切です。また、先ほど述べましたとおり、こどもたちの意見表明の機会の確保や、主体的な活動の場の創造を、学校・地域・社会が共に創り上げていくことが求められていると思っています。そのためには、市長や委員からもありましたとおり、発信・周知していくことも大切であると思います。

最後に、過日開催されました、市内中学校における創立記念式典での生徒代表の言葉を一部抜粋してご紹介します。市長も教育委員の皆様もご参加いただきましたので、振り返りとしてお聞きいただけると幸いです。

「学校生活では、部活動や行事、委員会など、様々な経験を通して学んだことを、授業や私生活、学級活動へ自然に生かすことができます。どうすれば学級活動がよりよく行えるかを考

え議論したり、行事の際には場を盛り上げつつ真剣に取り組めるように気を引き締めたりと、楽しみながら成長できる雰囲気を作り上げる力をもっています。そして、そこで得た力を仲間のために発揮できる生徒ばかりです。私たちは、地域の方々に支えられて学校生活を送ることができています。今度は自分たちの力で地域に恩返しをしたいという気持ちから、落ち葉掃き、青少対まつりでのボランティアなどを行っています。これらの活動を通して、この小平市を今よりももっと、生き生きとして、笑顔あふれる地域にしたいです。」

こどもたちの成長を感じるうれしい言葉であると感じました。

今後も、こどもたちの健やかな成長のために、また、そのこどもたちが創っていく小平市の発展のために、よりよい教育活動の実践に向けて、教育委員会としても力を尽くしていきたいと思っています。

本日は、市長におかれましては、総合教育会議を開催いただき、誠にありがとうございました。この総合教育会議を通して市長と教育委員会が協議・意見交換を行うことで、更なる理解を深め合うことができたのではないかと思います。小平市の教育に関する事業が積極的に推進できるよう、今後ともご支援のほど、よろしくお願いいたします。

○小林市長

ありがとうございました。また、皆様におかれましても、貴重なご意見をいただきまして、誠にありがとうございました。

そろそろ終了の時間となりましたので、本日の議論のまとめをさせていただきます。

本日は、「生きる力を育む 小平市のこれからの特別活動」をテーマに、皆様から多角的で示唆に富むご意見を賜りました。教育長からは、なすことによって学ぶということや、皆様の意見もまとめていただきましたが、ご見解の多くに、私も共感いたしました。

小平市第四次長期総合計画では、年齢の違い、性別、障がいの有無、文化の違いなどを超えて、お互いを尊重し、自分らしく活躍できる社会をありたい姿として描いております。このような姿の実現において、特別活動が果たす役割は大きいものと認識しており、本日、その価値を教育委員会の皆様と共に再認識できたことは、大変有意義であったと考えております。

また、特別活動は、地域に展開しやすい教育活動であると理解しておりますので、今後、そのような活動が増えていくことも期待しております。

（閉会）

○小林市長

それでは、本日の議題は以上となります。

本年度の定例の総合教育会議は、本会議が最後となります。来年度の総合教育会議につきましても、本年度と同様に年2回の開催を予定しておりますので、引き続きご協力のほどよろしくお願いいたします。

それでは、本日の会議はこれで閉会といたします。ありがとうございました。